

藝大通信

GEIDAI TSUSHIN



25

SEPTEMBER 2012
TOKYO GEIDAI
東京藝大広報誌

中村政人

受賞教員インタビュー

【第四回】研究室探訪
文化財保存学専攻 保存修復彫刻研究室

【第四回】卒業生に聞く。

井上芳雄

【第八回】受賞学生インタビュー

山本良浩 藤江扶紀 秋野翔一

【第十七回】教員は語る

川瀬智之×古賀慎治

【第六回】上野の寄り道散歩道「東京都美術館」

東京藝術大学広報誌 藝大通信 No. 25 SEPTEMBER 2012

編集発行 東京藝術大学 藝大通信編集部

中村政人

受賞教員インタビュー 第6回

「アーツ千代田3331」の開設と運営により
平成二十二年度芸術選奨文部科学大臣新人賞「芸術振興部門」を受賞。



Photo by Hiroaki Horiguchi

アートセンターの必要性

廃校になった千代田区立練成
中学校の再利用計画として提言
された「ちよだアートスクエア構
想」を受け、二〇一〇(平成二十二
年)に「アーツ千代田3331」を開

設し、統括ディレクターとしてさ
まざまな活動が集まるアートプ
ラットフォームをつくり出し運営
してきたことが評価され、今回の
受賞に至りました。

都心の過疎化による統廃合で
利用されなくなった校舎施設を

舞台に、どのようなコン
セプトとアイディア
をもとにして文化活
動を行い、区民にサー
ビスすることができ
るか。建築のリノベーシ
ョンと運営の設計、つま
りハードとソフトのデ
ザインを提案する「ち
よだアートスクエア構
想」の事業計画に公募
し、実際に手がけるこ
とになったわけです。
現在のアジアのアート
シーンのなかでますま
す重要度を増す「ア
ートセンター」の具体性と可能性、東
京都の千代田区にその施設と機
能を置く意味を訴えたところ、そ
れが認められたのでしょう。

僕自身の出身校であり、いま教
員を務める東京藝術大学を卒業
しても、それだけでは社会的信用

第25号 目次

02 受賞教員インタビュー 第6回

中村政人

04 geidai gallery vol.5

手塚雄二 朝霧

06 教員は語る 第17回

川瀬智之×古賀慎治

09 受賞学生インタビュー 第8回

山本良浩 藤江扶紀 秋野翔一

12 TOPICS

映旬 美旬 音旬

20 卒業生に聞く。 第4回

井上芳雄

22 研究室探訪 第4回

文化財保存学専攻 保存修復彫刻研究室

24 上野の寄り道 散歩道 第6回

東京都美術館

26 上野の杜の波瀾万丈 第14回

東京音楽学校邦楽科への長い道のり 前篇

橋本久美子

28 展覧会&演奏会情報

漆芸 軌跡と未来

藝大21 和楽の美「悟空と九尾の狐」

30 NEWS 2012.02 ~ 2012.07

編集後記



アーツ千代田3331 外観 ©3331 Arts Chiyoda

を得ることはできないし、アートシーンで活動する場が与えられるわけではないという現実があります。こういった現状にもかかわらず、参加の機会が開かれたスペースをアーティスト自らがつくり出すという意識は、欧米に比べると日本はかなり遅れているのです。多くの人が発表できるという敷居の低さは、同時に、いろいろな

ジャンルの人がクロスする場でもあり、観る人に対しても幅広いジャンルの芸術に接する機会を提供する場にもなるのです。そうして「アーツ千代田3331」は、結果的に約二年間でおよそ八〇〇の展覧会やイベントが開催され、八〇万人という集客がありました。

新しい価値を導く「場」

僕の場合、自分自身の作家活動をしながらも、目に見えないものに対する興味を持続的にあります。例えばアートシーンをどのようにすれば活性化させることができるか、地域のなかで創造的な活動がなぜ必要なのかという点も、欠かすことのできない研究対象なのです。物をつくるための

悩みを市民と共有したり、つくった物をどのように伝えるかを一緒に考えたり、実現した展覧会をみんなで鑑賞し評価するといったこと。そういったひとつひとつのプロセスや仕組みのなかで見えてくるリアリティが重要だと考えて活動してきました。

与えられた場所で何かを生み出すのではなく、新しい価値を導くために自分たちの場所をつくり、自分たちの美意識を実現していく。こういったオルタナティブな問題意識から発する活動は、世界的には主流の芸術表現であり芸術行為なのです。

また「アーツ千代田3331」のような活動においては、かつては「五軒町」と呼ばれていた地域の住民、練成中学校の卒業生、周囲で働く人々に何を果たすことができるかといった大きなミッションを帯びています。ローカルコミュニティに文化がどのように根差しているか、今後どう伝わっていくかという視点から、市民の主體的な活動が、街の循環装置や潤滑剤になるように促すことは、アーティストにとって重要な使命のひとつだと考えているのです。

藝大通信
No.25
TOKYO GEIDAI
東京藝術大学広報誌
藝大通信 第25号

編集発行

東京藝術大学藝大通信編集部

編集委員

松下 計 (美術学部デザイン科准教授・編集長)
斎藤典彦 (美術学部絵画科日本画教授)
小鍛冶邦隆 (音楽学部作曲科教授)
毛利嘉孝 (音楽学部音楽環境創造科准教授)
筒井武文 (大学院映像研究科映画専攻教授)
大石 泰 (演奏芸術センター准教授)

アートディレクター

松下 計

表紙デザイン

松下 計

表紙撮影

堀口宏明

撮影

堀口宏明

制作

永井文仁 (美術学部附属写真センター)

株式会社 平凡社

発行日

平成二十四年九月七日

お問い合わせ先

東京藝術大学総務課

〒101-8744 東京都台東区上野公園12-18

電話 〇五〇一五五二一〇二六

FAX 〇三二五八五七七六〇

E-mail: toiwase@ml.geidai.ac.jp

URL: <http://www.geidai.ac.jp/>

中村政人 (なかむら まさこ) 准教授 | 美術学部絵画科 (壁画)

一九六三年秋田県大館市生まれ。一九八七年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業。八九年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程 (壁画研究室) 修了。九〇年、九二年弘益大学大学院西洋画科修士課程卒業 (大韓民国政府招待奨学生)。二〇〇三年、東京藝術大学美術学部絵画科助教授 (〇七年、准教授)。「美術と社会」「美術と教育」とのかかわりをテーマにさまざまなアートプロジェクトを進めるアーティスト。第四回ヴェネチア・ビエンナーレでは日本館の代表作家として参加。九八年よりアーティスト「KANDADA」(神田)を立ち上げ、秋田県大館市で「ゼロダテ」(青山県水見市での「ヒシグ」など)地域での市民参加型アートプロジェクトを数多く手がける。二〇二二年東日本大震災復興支援「わがプロジェクト」を立ち上げる。アートプラットフォームの最先端を開拓し、新たなソーシャルインクルージョンを実践する。





美術学部絵画科(日本画)―教授 手塚雄二『朝霧』



教員は語る

第17回

美術学部芸術学科 准教授

川瀬 智之



博士論文、コンテンツワークス、2008年

美術との出会い、音楽との出会い

川瀬 多摩美術大学の芸術学科は、美術評論家を中心となつて基礎をつくつたので、現代美術を教えることに大きなウェイトを占めていました。そういう環境からかなりの影響を受けて、現代美術作家の作品を観たり、展覧会のパンフレットを読んだりしていると、作り手にも評論家にも哲学の素養のある人が少なくないことに気づいたのです。それで現代美術を理解するには、哲学を勉強しなければいけないと思うようになりました。

美術に興味を抱いたのは早くて小学生のころからでした。返子に住んでいた六年生の時、神奈川県立近代美術館に、ジェームズ・アンソールというベルギーの画家の展覧会を一人で観に行ったことを覚えています。図書館からゴッホやクレーの画集を借りてきて解説を読むのも好きでしたね。

中学のころは、朝日新聞の日曜版に連載されている名画紹介記事に添えられた、高階秀爾先生のコメントが楽しみだったことから、先生の本を読んだりしていました。そして学校の美術部に入ったものの、性格的に画家向きではないなと思ひ、研究する側に立ちたいと考え始めていました。

古賀 父が音楽の教員だったので、僕が父が教える横でいつも聴いていて、「習いに来る人より音を当てるのができていた」と後から聞かされました。でも、幼稚園からピアノを習い始めたものの、うまくならないからと小学校に入るとやめてしまいました。その後、一九七六（昭和五十一年）年に佐賀県で国体が開かれることになり、楽器が各学校に配られ、指導者が来て金管バンドをつくつてといった盛り上がりになり、僕も小学四年生から金管バンドでトランペットを吹くようになりました。

なり、僕も小学四年生から金管バンドでトランペットを吹くようになりました。

中学校に入ってからトランペットを続けるつもりだったのですが、すごく上手に吹いている先輩がいて、僕にはとても無理だと思ひ、その次に好きだったトロンボーンをやることにしたので。そのころ、映画『ロッキー』のテーマが一世を風靡した影響で、金管楽器のなかでトランペットが一番人気が高かった。僕もハイノットヒッター（非常に高い音域を正確に演奏すること）で知られるメイナード・ファーガソンの真似をしたりしていました。ほかには、テレビショーのアレンジと指揮で頭角を現し、その後映画音楽で次々と大ヒットを連発させた、パーシー・フェイリスが率いる楽団の金管楽器の使い方がとても好きでした。

今にして思えば当時のアメリカ西海岸のプレーヤーが吹く音であるとか、録音エンジニアたちの音の好みといったものに惹きつけられていたのだと思います。

芸術を哲学的視点から考える

川瀬 博士論文でとりあげたフランスの哲学者メルロー・ポンティの著作は、一九六〇年代には、哲学者以外の美術家やアーティストたちもよく読んでいました。アメリカでも日本でも、自分の芸術観のなかに取り入れている作家たちがいたんですね。

一九七〇年前後に「もの派」という美術運動があり、その代表的作家に李禹煥という韓国出身のアーティストがおります。李禹煥は評論活動も活発で、メルロー・ポンティをずいぶん取り上げて論じていたのです。そこで、メルロー・ポンティを研究してみると、李禹煥の言っていること、やっていることがより深く理解できるの

古賀 慎治

音楽学部器楽科(管打楽) 准教授

藝大への期待・抱負・提言



ではないかと思ったわけです。

一方で思想家が画家に非常にこだわりのもって論じ、そこから養分をくみ取っているという場合もあります。たとえばメルローポンティにとつてのセザンヌで、彼がどう見て、どういうふうに論じ、どんな影響を受けたかを考えていくと、セザンヌからメルローポンティ、そしてミニマルアートや李禹煥へのつながりが理解できるわけです。

古賀 今日、川瀬先生とお話をするということ、佐々木健一さんの『美学への招待』という本を持ってきました。僕はこの本を読んで、また先生の話を聞いて、音楽も美術と共通で、哲学的な手法と演奏を分けて考えていたわけではないのだと思いました。

学生時代に、「同じトロンボーンでも、違う人が吹けば全く違う音になる。どういう音がいい音か」ということを先輩や後輩と議論しました。「ああいうブレイヤーのような音を吹きたい」といえば、「では、あのブレイヤーの音はどういう音なんだ」ということを、一言ずつ言葉で形容してみようという具合に徹夜で話し合ったのです。「明るい音」「暗い音」「奥行を感じる音」「薄っぺらな音」「固い音」「やわらかい音」というようなことを考えたりしました。自分が「こうだ」と思って吹いている音が、果たして相手にどのように聞こえているのかということは、常に関心のあることです。ですから大学の授業では、学生に考えさせるヒントとして、「ちょっと言葉で考えてみようよ」とよく言うのです。

トロンボーンを吹くという行為から、いろいろなものをそぎ落としたら何が残るかという話をよくします。最終的には、大きく息を吸って楽器をバーンと鳴らした時に、それが自分の鳴らしたい音なのかを考えることに尽きるわけ

です。曲の難しさやスタミナといったクリアすべき問題がほかにあったとしても、大もとの部分をないがしろにしてはいけないのではないのでしょうか。

社会への視点、社会との接点

川瀬 藝大の環境として、美術学部には実技とともに芸術学科があり、音楽学部のほうでは実技とともに楽理科がある。だから美術も音楽もかなり総合的に学べるわけで、それが利点ではあるのだけれども、学生にとってそれが利点として生かされていないところがあるようです。芸術学科と美術学部の他科との間に壁があるという話も耳にしたことがあります。そういった部分は何とかしないといけないでしょう。

古賀 僕は四年生の半ばまで上石神井の寮に入っていたので、美術学部の人とも交流があり、いろいろな価値観を持った人がいるんだなということを学びました。けれども、果たして今そういうことがあるかというと、やはり「個」が強くなり、ひとりひとりの距離があるように感じる部分があります。学内にいるとどうしても、上野近辺や東京中心のものの方になっちゃいます。うのですが、なるべく世界に向けた視点を持つてもらいたいなと思います。

川瀬 現代美術の世界にはもちろんいい作品も出ているけれど、特に美術の歴史や制度を扱うような作品の場合、制度の内部では意味を持つても、外部の人にとっては、何をやっているのかわからないということになる。他方で現代美術と呼ばれる領域以外でも、現代につくられている作品はあるわけで、そこにいいものがないわけではない。評論でも、あるいは美学者が現代美術を扱う場合でも、どうも「現代美術」と



いう枠組みだけが先行して、その枠の中で物が考えられてきたところがある。そういういた枠自体も外さないとけないのではないのでしょうか。

美術の専門家ではない人から見れば、自分にとっていいものであれば、それが現代美術かどうかということは別に関係ないわけです。そういう現代美術の枠組みの外からの目線、一般の人の目線に近いところから作品を見ることと、哲学的なものの考え方とのつながりというものが見出せていければと思っているところです。

一方で五月に亡くなられた吉田秀和氏のように、主観的な印象から一気にその先の本質に入っていくという評論が多くの読者から支持されてきたということがあります。なるべく客観的な論述に徹するという美学者の立場からすると、彼の評論は「主観的に過ぎる」という言い方はあり得るでしょう。でも私は必ずしもそういう立場ではなくて、主観的な印象や体験から「美」の問題に入っていくという方法も有効なものではないか。主観性を入り口にしながら、本質的な問題へと展開し、その展開の力によって読者を引きつける力を、美学も持たないといけないと私は思います。

古賀 僕が藝大准教授として着任するまで所属していた都響（注・公益財団法人東京都交響楽団）は東京都が設立したオーケストラということもあって、定期演奏会やホールでのコンサート以外に、子供たちに向けた演奏活動が、業務としてかなり大きな部分を占めていました。また少人数でいろいろ施設を回ったり、ふだん生の演奏を聞けない離島に行ったりすることもあるので、地元の方と信頼関係をつくって、お互いに得るものがあるように、ということを学んできたので、そういうことを生かせたらなと思

います。

やはり大きかったのは昨年の三月十一日の大震災です。当日は、都響の演奏旅行で函館にいましたが、函館のホールでの大きな揺れのなかで、被害の全体像がしばらく見えなかった。結局その演奏会を中止にして、八戸、盛岡と続くはずだった予定もすべて中止にして、東京に飛行機で帰ってきたのです。その後、都響としては、ホールの安全性が確認できないということもあって、なかなか定期演奏会が開けなくて、ほぼ一か月間自宅待機になりました。いろいろな情報が入ってきながら、何もできないというもどかしい時期を経験しました。それが音楽家というのは一体何だろうということを、改めて考えるきっかけになりました。

「音楽なんかやっていていいのか？」というところまで思いつめました。音楽仲間もみんな同じように言っていました。恥ずかしい話ですが若いころは、楽器をしつかり吹ければ報酬を得られると思っていたんです。でもただそれだけではなくて、自分が感動したことを伝える努力をして、相手が喜んでくれるとこちらも嬉しいという相乗効果を生み出すようにやっていかないとけないと、その時期に考えていました。

福島県の郡山市には震災前から室内楽を演奏しに行くという活動をずっとやっていました。そこへ今度はオーケストラで行く計画になっていたのですが、郡山市のホールが一年くらい使えないような損傷を受けてしまい、また放射能の影響もありましたので一度話は流れてしまった。ところが、なんとか楽員のユニオンが主体となり、郡山に演奏に行くことができて、気分的に少し楽になりました。

ホールが使えないので、大学の講堂で演奏させてもらったんですが、本当に喜んでもらえた

のです。「今ごろ音楽なんてとても聞く気にならない」という話も聞いていたのですが、今まで感じたことのないような反応でした。この経験を踏まえ、今後は被災地での演奏活動も継続的にやっていきたいと思っています。

川瀬智之（かわせ・ともゆき）

美術学部芸術学科 准教授

一九七一年神奈川県生まれ。

一九九四年多摩美術大学芸術学科卒業。二〇〇八年東京大学大学院人文社会系研究科博士課程（美学・芸術学）修了。

二〇〇七年四月より多摩美術大学美術学部芸術学科非常勤講師、二〇〇九年十月より東京藝術大学美術学部芸術学科非常勤講師、二〇一〇年五月より二〇一一年三月同准教授（代替）。二〇一一年四月より上智大学文学部哲学科非常勤講師。二〇一二年四月より現職。

古賀慎治（こが・しんじ）

音楽学部器楽科 管打楽器 准教授

一九六三年佐賀県生まれ。

一九八六年東京藝術大学音楽学部器楽科卒業。一九八七年一月新日本フィルハーモニー交響楽団副首席奏者として入団。

一九九七年四月同楽団首席奏者に就任。一九八五年日本管打楽器コンクール・トロンボーン部門第一位。一九八七年ブラハの春国際音楽コンクール・トロンボーン部門ファイナリスト、ディプロマ賞受賞。二〇〇〇年一月東京都交響楽団へ移籍。二〇〇〇年四月より日本大学芸術学部音楽学科非常勤講師。

二〇〇四年四月より二〇〇九年三月東京藝術大学音楽学部器楽科非常勤講師。二〇一二年四月より現職。

二〇〇四年四月より二〇〇九年三月東京藝術大学音楽学部器楽科非常勤講師。二〇一二年四月より現職。

藝大の在校生・卒業生は、
公募展やコンクールで栄誉ある賞を受賞し、
また各分野の最前線で活躍している。
若き才能がふだんの努力とさらなる意欲を語る。

第15回文化庁メディア芸術祭「アート部門」大賞受賞

山本良浩

◆大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了

僕が中学生から高校生だった1995(平成7)年前後、もっとも身近なアート作品といえば、ミュージックビデオやアニメーションでした。いまから思えばさまざまなタイプの映像メディアに接することができたのですが、絵画や写真のようにひとつの静止したイメージをつくりこむよりも、時間軸のなかで意味が発生する構築物を組みあげること、そのころから興味があったのだと思います。

武蔵野美術大学映像学科を卒業したあと、大阪の千里にある彩都IMI大学院スクール(現・IMI / グローバル映像大学)に通いました。IMIに入学したのは、実験映像の歴史を調べていくと、個人でつくることができる映像作品として、映画の世界よりも、現代美術の文脈のほうに可能性があると考えたからです。椿昇さんやヤノベケンジさん、やなぎみわさん、高嶺格さんが講師を務めていたので、空間上に作品を展開する、一線級のアーティストにふれてみることで、できるのが大きな魅力でした。

IMI在学中の2006年は、取手アートプロジェクトのゲスト・プロデューサーがヤノベケンジさんでした。そのおりに施設ごとに展示企画を募集するなかで、污水处理施設を使い、映像を用いたインスタレーションを発表することができたのです。水面に魚のイメージを投影し、それをダクトからのぞき込む「GOLD FISH」という作品で、昔はその施設で魚を飼い、毒がないか確認していたという地域の記憶や物語に寄りそった作品でした。その後、藝大の大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻に進み、IMIの設立者でもあり、メディア・アートから人類学にまで精通されている伊藤俊治先生の下で学びました。伊藤先生からは、テーマを作品化するときはどういう構造に落とし込んだらいいか、社会的なテーマを扱うときどういったことに気をつければいいか、歴史からピックアップしてこういう作家が参考になるといったことを具体的に教わりました。

文化庁メディア芸術祭アート部門で大賞をいただいた「Que voz feio (醜い声)」は、大学院の修士1年のときに制作した作品です。遠戚にあたる「出戻り移民」の双子の女性をモチーフに、空間上に2つの画面を使って映写することで生じる矛盾が、重要なテーマになっています。1つの画面だと没入できるにもかかわらず、画面が2つになることで経験が遮られ、批判的に見るシステムを生み出すことができます。またフルハイビジョンで撮ることによって、高解像度の利点から、室内にあるインテリアのディテールまで見えるのです。メディア芸術祭の大きなスクリーンで観たとき、双子の持ち物にフォーカスをあてたシーンなど、自分でもその効果に気づきました。人の記憶の不確かさや壊れやすさが、真実や虚構を超えたりリアリティをもつことを描きかかったのですが、意図したテーマと手法が伝わり、大賞を受賞することができたのではないかと思います。



「Que voz feio (醜い声)」2011年

やまもと・よしひろ

1981年千葉県生まれ。武蔵野美術大学映像学科卒業。東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻修了。イメージ、音、文字、展示形式など、映像を「見る」という行為を異なる認識の多重体と捉え、短編映像作品とインスタレーションを制作。映像作品「Que voz feio (醜い声)」がイメージフォーラム・フェスティバル2011の「ジャパン・トゥモロー」(一般公募部門)にノミネート。同作品で2011年度第15回文化庁メディア芸術祭「アート部門」大賞を受賞した。



2011年第80回日本音楽コンクールバイオリン部門本選演奏風景 © 毎日新聞社

ふじえ・ふき

大阪府出身。4歳よりバイオリンを始める。2002年、第56回全日本学生音楽コンクール全国大会小学校の部第1位。2007年、第76回日本音楽コンクールバイオリン部門第3位。2010年、第19回ABC新人オーディション合格。2011年、第80回日本音楽コンクールバイオリン部門第1位。また、東京藝術大学にて、安宅賞を受賞。数多くのコンサートや音楽祭に出演。これまでに、東京交響楽団、京都市交響楽団などと共演。バイオリンを故工藤千博、清水高師、漆原啓子、漆原朝子の各氏に師事。現在、東京藝術大学4年在学中。



第80回日本音楽コンクールバイオリン部門第1位

藤江扶紀

◆音楽学部器楽科（バイオリン）4年

もともと母がピアノを弾いていて、父も音楽を聴くことが好きだったので、家にはクラシックの音源がたくさんありました。バイオリンは4歳のときに初めて手にしました。2人の姉のうち、すぐ上の姉がバイオリンを習いにいくというのでついていったら、私のほうがすぐに感覚をつかんだみたいなんです。

小学校2年生の時、元京都市交響楽団コンサートマスターの工藤千博先生の公開レッスンを受けることができたのです。工藤先生のレッスンはとても楽しく、充実していたので、バイオリンという楽器をそれまでよりもずっと好きになり、続けていくことにしました。私自身、演奏者としてまだまだなのですが、小さいころに埋めこまれた表現力というのは忘れないものだと思うのです。体も頭も柔軟な時期に身についたものは、その後に習得したものとは比べものにならない。工藤先生は、言葉でも手本でも表現がすばらしく、先生と出会えたことはほんとうに幸運でした。

藝大は練習環境に恵まれていますし、上野の杜も大好きです。いま学内では漆原朝子先生に、学外では漆原啓子先生に指導を仰いでいます。普通高校から藝大に入ったので、高校までは音楽以外の仲間の考え方を吸収し、大学に入ってから演奏家の考え方を知ることができたのがとてもよかったと思います。

高校2年生のときにも日本音楽コンクール（2007年）の第3位になっているのですが、それ以来コンクールに出なかったのは、自分の出したい音を出すために、体の使い方を根本から変える挑戦をしていたからなのです。実は今回コンクールに出るのも、初めは周囲から反対を受けていました。なぜかというと、出るからにはやはり前回以上の成績を残すことが求められますが、その保証は全くもってないからです。でも、自分の成長を確かめたくて、最後は自分の判断で挑戦することに決めました。

今回のコンクールでは課題曲（バルトークの《無伴奏バイオリン・ソナタ》とシュー

ベルトの《ロンド》）が大変難しく、くじけそうにもなりました。結果的に進むことができた本選では、チャイコフスキーの《バイオリン協奏曲》を選んで演奏しました。これは前回3位になったときにも弾いた曲で、2009（平成21）年に亡くなられた工藤先生との思い出もあったからです。これまで演奏後に後悔することが多かったのですが、今回本選で弾き終えたあとは、ものすごい達成感と充実感でした。しかもオーソドックスや上品と評されることが多かったのに、初めて情熱的や野性的、本選に残った5人のなかでいちばん音量が出ていたよ、と言ってくださった方がいたのです。それがほんとうにうれしくて。

いまは藝大生活最後の1年を楽しみながら、海外留学を目指しているところです。藝祭では有志からなる「藝@orchestra」の中心メンバーとして活動してきたのですが、今年はマーラーの交響曲第5番を奏楽堂で演奏します。その準備で忙しいのですが、いまはそれがほんとうに楽しみです。

秋野 翔一

◆大学院映像研究科修士課程映画専攻(監督領域)修了

映画を意識したのは高校生のころで、すでにDVDやVHSで過去の作品を観られる時代でしたから、過去に遡ってさまざまな作品に接することができました。そんな中で、邦画では北野武監督や黒沢清監督の作品が印象的で、北野監督の映画『キッズ・リターン』(1996年)は、自分も映画を撮ってみたいと思うようになった作品のひとつです。

東京工芸大学芸術学部の映像学科に進み、3年生からは、脚本と映画理論のゼミである山川直人監督の映像表現研究室で学びました。山川先生からは、「ものづくりにはセオリーや文法があるから、つくるだけならだれでもできる。そのなかでも、絵や彫刻や音楽よりも、カメラで撮影する映画はとくにその傾向が強い。そのことをつねに考えていなければいけない」ということを学びました。東京工芸大学を卒業するにあたり、目標だった藝大大学院を受験しました。大学進学の間期間中の2004

(平成16)年に、藝大に大学院映像研究科が設置されることが発表され、北野監督、黒沢監督の教授就任が話題になっていたのです。

今回、カンヌ国際映画祭の「シネフォンダシオン部門」にノミネートされた『理容師』は藝大大学院の修了制作でつくった作品でした。シネフォンダシオン部門は、世界中の学生を対象にした、公募によるコンペティションで、今年は1700作のなかから15作品が本選にノミネートされました。日本から選ばれたのは8年ぶりとのことで、候補になったことは、周りの仲間のほうが喜んでくれたし、驚いてくれました。

大学院ではもともとファンだった黒沢清先生の下で勉強することができました。先生はあまり焦らず、生涯をかけて映画にかかわってほしいと僕たちにおっしゃいます。ゼミの雰囲気も、お茶をしながらのフランクで親密なもの。技術的なアドバイスではなく、頭ごなしになにかを言われることも

ないので、かえって大きな影響を受けたかもしれません。

『理容師』は、フィルムで撮影したこともこだわりのひとつ。デジタルとどちらがいいか言いきれないですが、教育的にはフィルムを学んでおいたほうがいいのではないのでしょうか。デジタルだと無制限にとることができますが、フィルムだとそうはいきません。予算もかかり、撮影時や作品の完成尺などもつねに時間の制約を受けます。そこで映画が、限られた時間と切り離すことができない芸術であることを改めて意識するのです。この作品では、ロケーションも室内だけで展開しました。フィルムを使うこともそうですし、自分に枷をつくりたかったのです。すべてが自由であるより、制約があったほうが自由は生きてくる。カンヌでの受賞はかないませんでした。制約のなかでつくる緊張感が作品に反映されたのではないかと思いますし、カンヌ映画祭への参加も含め、とてもよい経験でした。



『理容師』2011年

あきの・しょういち

1985年東京都生まれ。2009年東京工芸大学芸術学部映像学科卒業。同年東京藝術大学大学院映像研究科入学。11年同大学院修了。おもな監督作品に『ライムキャッチボール』、オムニバス映画『紙風船(第四話「紙風船」)』がある。今年、映像研究科修士課程映画専攻修了作品である『理容師』が第65回カンヌ国際映画祭「シネフォンダシオン部門」にノミネートされた。

映旬

1

アニメーション専攻 第三期生修了制作展

◎アニメーション専攻

三月九日から十一日まで、本学横浜校地馬車道校舎において、「アニメーション専攻第三期生修了制作展」を開催した。

今回の修了制作展では「JANIS」というテーマを掲げ、作品上映だけでなく、作品の制作意図を垣間見ることのできる原画や人形、絵コンテなどの展示や、作者別のメイキング映像の上映、片桐仁（コメディアン・俳優・彫刻家）、佐々木敦（批評家）、山村浩二（本学教授）による感想談義、ゼミごとの教授と学生との作品トークを開催した。

2

公開講座―馬車道エッジズ 「コンテンツポラリ―」 アニメーション入門」第九回

◎アニメーション専攻

三月十八日、本学横浜校地馬車道校舎において、公開講座―馬車道エッジズ「コンテンツポラリ―アニメーション入門 第九回」を開催した。「感性と知性、ギル・アルカベッツ」と題して、ドイツよりインディペンデントのアニメーション監督、ギル・アルカベッツ氏を招聘し、『スワンプ』『ルビコン』など作品上映と併せ、自身の創作の軌跡をたどりながら、短編アニメーション創作の発想から、実現までを、作品上映を交え、本学教授・山村浩二が企画・進行して開催した。

3

openTHEATER/ext (オープシアター／エクステ) 「超高精細デジタル映像が 開く未来」

◎映画専攻

三月十六日、本学横浜校地馬車道校舎一階ホールにおいて「文化財」と「オーロラ」の二つのテーマで超高精細映像の上映をおこなった。

「文化財」では、馬車道校舎のすぐ近くにある神奈川県立歴史博物館のご協力をいただき、博物館所蔵の「従江戸長崎迄海陸之図」をギガピクセル（数億画素）サイズでデジタルデータ化したものを表示しながら、同博物館専門学芸員の古宮雅明氏の解説があった。今回の作業によって新たに明らかになった事実もあった。

「オーロラ」では平塚市博物館館長の鴈宏道氏の解説とともに、映像研究科技術職員の荒木泰晴がアラスカにおいてフィルムおよびデジタルで撮影した連続写真をもとに生成した動画を上映した。定員を上回る盛況であった。

4

映画専攻第六期生修了作品展

◎映画専攻

本年三月に修了した映像研究科映画専攻第六期生の修了制作作品の上映が、本学横浜校地馬車道校舎では三月二十四日と二十五日、渋谷ユーススペースでは六月二日から十五日まであった。制作作品は『ソクラテック・ラブ』『虚しいだけ』『ユートピアサウンド』『インビジュアルモンスター』の四作品である。特に有料上映となる渋谷ではレイトショー枠ながら前売り券がなくなるなど注目の高さをうかがわせた。



2

公開講座—馬車道エッジズ
「コンテンポラリーアニメーション入門」
第9回
アニメーション専攻



「空の卵」大川原亮

アニメーション専攻第3期生修了制作展
アニメーション専攻

1



オープンシアター／エクステ
「超高精細デジタル映像が開く未来」
映画専攻

3

4

映画専攻第6期生修了作品展
映画専攻

上から、
『インビジブルモンスター』監督：松尾健太
『ソクラティック・ラブ』監督：早坂亮輔
『ユートピアサウンズ』監督：三間旭浩
『虚しいだけ』監督：今橋 貴

TOPICS OF
FINE ARTS

2012.02-07

美旬



「スカイネスト」2011年度設置作品(台東区)



「イメージマケット3」2012年度設置作品

GTS(藝大・台東・墨田) 観光アートプロジェクト 2012

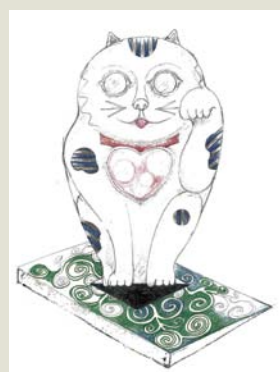
1



「Reflectscape」2011年度設置作品(墨田区)



「イメージドローイング2」
2012年度設置作品



「イメージドローイング1」
2012年度設置作品

1

GTS(藝大・台東・墨田) 観光 アートプロジェクト2012

昨年度に引き続き、本学と台東区、墨田区の三者共催による地域連携事業「GTS 観光アートプロジェクト2012」が実施される。

このプロジェクトは、両区の間を流れる隅田川の存在を絶好の地理的特性と捉え、東京スカイツリーと浅草をアートで結び、隅田川エリア全体として観光を楽しみながら散策できる回遊ルートの創設を目指している。

平成二十二年度から二十四年度までの三年間にわたり、今春開業した東京スカイツリーのビューポイントに環境アート作品やアートベンチを設置する「アート環境プロジェクト」と、地域での現代美術展、インスタレーション、パフォーマンス、映像展や音楽コンサートなどの複合的な展示をおこなう「隅田川 Art Bridge」の二本柱を軸に実施している。

平成二十四年度プロジェクトの実施に先駆け、七月七日から十八日には、今年度新たに設置される環境アート作品四点とアートベンチの制作を区民に公開する「マケット・プランニング展(前期)」、また、七月二十一日には、小中学生を対象にした区民参加ワークショップ「東京スカイツリーを描く、東京スカイツリースポットを探せ!」が実施された。



作品展会場

ぼくの色、わたしの形 —第六十四回台東区小・中学校連合作品展—

2

2

ぼくの色、わたしの形

—第六十四回台東区小・中学校連合作品展—

美術学部では、昨年度に引き続いて、台東区教育委員会からの受託研究「図画工作・美術等の授業から展開する子どもの作品展示に関する実践的研究」（研究代表者…池田政治・美術学部長）に取り組んだ。本研究は、二〇〇八（平成二十年）に本学と台東区が締結した連携に関する協定の、教育及び人材育成に関する連携事項に基づいて委託を受けたもので、台東区の小・中学生による図画工作、美術、家庭、技術、書写の作品を展示する「台東区小・中学校連合作品展」を大学美術館において開催し、作品展示について実践的に検討することを目的としたもの。

昨年度の研究をもとに、今年度も、展示計画や作品展示方法について、美術教育研究室と大学美術館が中心になって、台東区立小中学校の教諭とより緊密に協議を重ねた。その成果は、大学美術館で開催された「ぼくの色、わたしの形」展（会期一月十四日～十八日）として結実した。

展示および撤去作業は、台東区立小中学校の教諭のほか、美術教育研究室の教員、学生や大学美術館の教員が協力しておこなった。展覧会は美術学部の専門性や大学美術館の特徴を活かした、質の高いものとなった。五日間の会期中の入館者数は、合計六八四九人。展覧会は好評のうちに幕を閉じた。



復元した壁画と宮廻教授



記者会見(左より荒井准教授、宮廻教授、宮田学長、北郷副学長)

保存修復日本画研究室 特許技術で高句麗古墳壁画を原寸大復元

3

保存修復日本画研究室 特許技術で高句麗古墳壁画を 原寸大復元

3

二月二十七日、文化財保存学専攻保存修復日本画研究室では、独自に開発した特許技術(※)を用い、世界遺産にも登録されている高句麗古墳群のなかから、江西大墓(六〜七世紀)の巨大な壁画に描かれた「四神図」の複製をおこない、石室全体を同素材かつ同質感、原寸大で復元することに初めて成功し、報道機関に公開した。

今回、復元した高句麗古墳群江西大墓の壁画「四神図」は、高松塚古墳壁画の源流とされ、われわれ日本人の文化のルーツを知るうえで重要なものだが、壁画の劣化が著しく、描かれている「四面図」の図像が消えつつある。対策として模写の制作が検討されたが、石室の壁画が持ち出せないことやその巨大さのため、従来の模写では膨大な時間と労力が必要になる。

そこで同研究室では、開発した特許技術を用いて、オリジナルとほぼ同質である花崗岩の質感を備えた壁画を複製し、六か月という短い制作期間に縦約三メートル×横約三・二メートル×高さ約二・三メートルの巨大な石室を復元することに成功した。壁画の図像復元においては、三十年前に撮影されたボジフィルムを使用し、高度なデジタル画像処理技術と手作業による彩色の併用によって、原寸大の鮮明な「四神図」を蘇らせ、現代では窺い知ることができなかった古代の文化を共有することが可能になった。

※本学特許取得第一号「質感を表現した素材の製造方法及び絵画の製作方法、質感を表現した素材及び絵画、建築用材料」(特許番号:第4559524号)。



第二回Dコンサート
第六ホールにて

1

TOPICS OF
MUSIC

2012.02-07

音旬

1

第二回Dコンサート

七月一日、第二回Dコンサートが第六ホールにおいて開催された。Dコンサートは、本学大学院で博士号を取得したアーティストが、実演を交えながら博士研究の成果を発表し、それに続いて演奏をお聴かせするという藝大ならではのユニークなコンサートである。今回は「演奏家と共に探る音楽の新しい聴き方」というテーマのもと、四人がそれぞれの研究と演奏を披露した。お客様からは「高度な研究に裏打ちされた表現に引き込まれた」、「わかりやすく興味をかきたててくれるトークで聴き方が変わった」といった感想が多く寄せられた。最後には、オリジナル・コラボレーション「声楽、バイオリン、三味線、サクソフォン、ピアノ」による《浜辺の歌》も登場。「異色中の異色のようなコラボは最高に感激でした」といった声も聞かれ、前回に引き続き大好評のうちに幕を閉じた。なお、第三回Dコンサートは、十一月十六日、カワイ表参道「パウゼ」で開催予定。



4

日中青少年交流演奏会(藝高)

上：奏楽堂での演奏会 下：生徒交流会



特別講座(古楽)「バロック時代の装飾について」

エミリオ・モレーノ特別招聘教授

2



福島県伊達市の中学生との交流活動

上、左下：松陽中学校体育館 右下：保原小学校体育館

3

2

特別講座(古楽) 「バロック時代の装飾について」

六月二十六日、特別招聘教授のエミリオ・モレーノ氏(スペインのカタルーニャ音楽院古楽科主任教授)による、バロック時代の装飾法をテーマとした特別講座が開催された。この講座では同時代の文献の紹介や解説とともに、実際の装飾例を音に出し、史料と実技の両面から装飾法についての理解を深めた。

モレーノ氏の豊富な知識にふれ、参加した学

3

福島県伊達市の中学生との 交流活動

管打楽器専攻では、この四月から福島県伊達市で市内中学生との交流活動をおこなっている。これは、福島県伊達市の東日本大震災の復興事業「吹奏楽きらめき事業」の一環であり、市内の中学校の吹奏楽部員への指導を通して、音楽の素晴らしさを伝えようというもの。今後、教員、学生、卒業生を定期的に派遣し、吹奏楽やアンサンブルのミニコンサートをおこない、生演奏を楽しんでいただく予定。来年二月三日には市内梁川中学校アリーナ(体育館)において、中学生たちとの合同吹奏楽演奏会が予定されている。

4

日中青少年交流演奏会(藝高)

三月二十七日、アジア総合芸術センタープロジェクト事業の一つとして、北京の中央音楽学院附属中等音楽学校生徒十五名と本学音楽学部附属音楽高等学校生徒九十名との交流演奏会がおこなわれた。本事業は、二〇一〇年三月に中国(北京・上海)で実施された交流演奏会の答礼として企画されたもので、両国の若人の瑞々しい演奏(民族楽器・邦楽を含む)をフィナーレの合同演奏が華やかに締めくくり、五〇〇名近い聴衆に大きな感銘を与えた。

井上芳雄

ミュージカルの舞台は
発見する毎日の積み重ね



在学中のミュージカル・デビュー

小学四年生のとき、劇団四季のミュージカル『キャッツ』が地元の福岡にやってきたので、家族四人で観にいきました。ミュージカルは初体験でしたが、すごく感動して、そのときからミュージカル俳優になりたいと思うようになりました。両親が 크리스チャンでしたので、小さいころから教会の聖歌隊に入っていて、もともと歌を歌うのが好きだったので、『キャッツ』を観て、歌で物語を表現するミュージカルの、訴えかける力の強さに衝撃を受けたんです。

『キャッツ』に出演されていたキャストの方々のプロフィールを見て、出身校に「東京藝術大学音楽学部声楽科卒」と書かれているのが目につきました。それで、東京藝大に進めばミュージカル俳優になれるんだと(笑)そう思って、中学生になると歌の個人指導を受け始め、ダンスも習うようになりました。

藝大に進んでからは、声楽の基礎をしっかり身につけるため勉強に励むとともに、学生らしい生活も楽しく送っていました。そんな大学二年生のとき、「舞台芸術論」という、バレエ、オペラ、ミュージカル、歌舞伎といった舞台芸術の第一人者が講義をする科目に、「エリザベット」の演出家である小池修一郎さんがいらしたのです。たまたまお話しすることができたので、「僕はミュージカルをやりたいと思っているんです」と言ったら、小池さんは「〇月〇日の〇時に帝劇の九階に来なさい」とおっしゃいました。じつはこのとき、小池さんはちょうど東宝の『エリザベット』の初演の準備をしていて、ルドルフ役の人だけが決まっておらず、探していたらしいんです。

プロのオーディションなんてなかなか受けられないし、今の自分がどれくらいのレベルなのか知っておきたい、それくらいの気分でした。小学生のときからの夢だったので興奮していましたし、周りも顔を知っている俳優さんばかりで、そのときの僕はミュージカル・ファンの一学生という感じだったかもしれません。ただ『エリザベット』は、もともと宝塚の公演も好きだったので、自分なりに感情を込めて歌うことができたと思います。そうして、「じゃあ君、ルドルフという役をお願いしたいんだけど」ということになったんです。だから、そのときは「シンデレラボーイ」だと言われましたね。



下：『ダディ・ロング・レッグズ〜あしながおじさんより〜』

写真提供／東宝演劇部

左：『ルドルフ ザ・ラスト・キス』 写真提供／東宝演劇部



約束していた卒業を果たす

最初の公演は三か月連続で、さらに翌年も地方を含めて約四か月の再演が決まっていました。それでは大学に続けて通うことができないため、約一年間休学したんです。その後、入学して六年目の年に復学し、足りなかった単位をとって卒業しました。というのも、初舞台を踏むときに、両親と事務所と東宝の皆さんとで、卒業することを条件にしていたんですよ。先輩のなかにも中退した人は少なくないですが、僕の場合、けじめとしてどうしても卒業したかったんです。入試がどれだけ大変だったか、それに入りたくても入れなかった友人たちも見ているから、最後まででは終えなければという気持ちが強くありました。

『エリザベート』に受かったときも、テノール専攻の鈴木寛一先生に三か月間大学を休む許可を得たんです。もしそのとき認めてもらえなかったら、僕は大学をやめざるをえなかったと思うのですが、鈴木先生は「もともとミュージカルが好きだったんだから、そちらの道をやりなさい」と言っ、休むことを許してくださいました。

声楽科の学生は一年生六〇人ぐらいで、当然クラシックのオペラや歌曲の歌手になりたいという人がほとんどですから、僕は正直浮いていました。オーディションに受かったときもみんな戸惑い、驚いたことでしょう。福岡では県のコンクールで一位をとっていたものの、藝大に来てみるとそんなに歌えるほうでもないし、「あの芳雄が」みたいな反応だったと思います。

でもその後、藝大を出てミュージカルの道に進む人は増えましたね。それまでは興味がなかったけれど、仕事として「食べていけるみたいだ」という理由もあるかもしれません。でも僕の後には続く人が出てきたのは、嬉しいことです。

感じたことをどう表現するかの積み重ね

藝大はほかの大学に比べると少数精鋭で規模が小さく、外に出ていかないかぎり顔ぶれが変わらないという面があります。たまたま僕は学外で活動する機会を得たのでラッキーだったのですが、藝大生はもつとこで得たものを自分でプロデュースし、表現し、売り込んだり、人脈をつかんだりできるだろうと思います。



舞台上に話を戻すと、何か月ものあいだ新鮮に演じるには、毎日なかにを発見する必要があります。自分がその役を演じる意味や、共演者が昨日とは違う演技をしたとき、どう感じるかつねに問い直す。生きること自体が本来はそういうものだと思います。

歌でも、踊りでも、お芝居でも、感じたことをどう表現するかの積み重ねで、ミュージカルはそれが一体になったものです。たとえ決められた台詞でも、それを口にしたとき自分の心が動き、人の心を動かすことができるのはすごいことだと思うんです。大変なこともたくさんあるけれど、そういう意味では毎日がとてもおもしろい。結局そういうことを感じたくて舞台を続けている気がします。

いのうえ・よしお

ミュージカル俳優。1979年、福岡県出身。2004年、東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。2006年、第13回読売演劇大賞、杉村春子賞受賞。2008年、第33回菊田一夫演劇賞受賞。2011年、第20回日本映画批評家大賞、舞台ミュージカル大賞（西條笑児賞）受賞。2000年に、ミュージカル『エリザベート』のルドルフ役で鮮烈なデビューを飾る。以降、その高い歌唱力と存在感で数々のミュージカルや舞台に出演。役者以外にもソロコンサートやディナーショー、CD制作などの歌手活動も積極的におこなっている。



藝大の教員たちが、
日々の研究やレッスンに勤しむ
「研究室」のなかには
どうなっているのだろうか？
なかなか見る機会のない
部屋を潜入ルポする。

大学院美術研究科 文化財保存学専攻 保存修復彫刻研究室 藪内佐斗司教授

Conservation Course Sculpture Laboratory
Graduate Department of Conservation
Graduate School of Fine Arts

研究室探訪

第四回

Visiting the Laboratory

太い木材を鋸で切り、鑿^{のみ}をふるい細かな
処理を施す。別の部屋では粘土で仏像の形
をつくり、また漆をこねる学生も見受けら
れる。上野キャンパス、美術学部中央棟の
地下にある保存修復彫刻研究室は、まさに
現代の「工房」といった趣だ。

この研究室は、一九六八（昭和四十二年）
に文化財保護委員会から文化庁が生まれた
時代に、文化財保護の現場で働く人材を育
成するために、藝大の修士課程に設置され
た文化財保存修復技術講座彫刻研究室がも
とになっている。一九九五（平成七）年には
大学院美術研究科文化財保存学専攻が組織
され、保存修復、保存科学、システム保存
学の三つの研究分野のうち、保存修復の中
の彫刻研究室として現在に至る。

「藝大の前身である東京美術学校の設立
に大きく貢献した岡倉天心は、日本の伝統
美術の研究と技術の保存を重要な課題と位
置づけ、文化財保護の原点をつくりました。
その意味でこの研究室自体の歴史は古いも
のではありませんが、東京美術学校創立の
理念を正統的に引き継ぐものだと言えるで
しょう」。

このように語る藪内佐斗司教授は、藝大
美術学部と大学院美術研究科で彫刻を学
んだ後、当時はまだ小さかった保存修復
技術研究室で六年間、仏像の修復に携わっ
た。その後独立して二十数年間、彫刻家
として個性的な作品を次々と発表した。と
くに二〇一〇（平成二十二年）の平城遷都
一三〇〇年祭公式キャラクター「せんたく
ん」は大きな注目を集めた。

日本における彫刻文化財の大半は仏教



日本が誇る彫刻文化財である仏像の修復と保存を、大学で学ぶ意義は大きい。

彫刻で、研究室で扱うのも木彫仏がほとんどである。こういった木彫仏を含め、文化財修理の基本原則では、現状を優先するか、当初部材を優先するかが大きな分かれ目になるという。何百年も前につくられ、いまわれわれの目の前にある仏像を後世にどのように伝えるかというとき、単なる資料ではなく仏教的世界観を表現したものであることを、学生にはまず学んでもらうそうだ。このことから歴史的彫刻を同じ材で忠実に模刻することが、重要な研究課題となる。

藝大美術学部彫刻科を卒業した小島久典さん(博士一年)は、「ものを一からつくることも意義だけれど、直して喜ばれることはもっとシンプルに幸せなことじゃないか」と保存修復を志した理由を述べる。さらに西洋の彫刻技法とは異なる、日本の伝統技法に刺激を受け続けているという。田之上愛さん(修士一年)は多摩美術大学美術学部の彫刻学科卒業。大学一年のとき、高知県の山間のお堂にお祀りされていた平安時代の木彫仏をさわらせてもらったことが、修復家をめざすきっかけになった。地域の住民から大切に信仰されてきた歴史の重みを感じ、こういった文化遺産を守り、伝えていきたいと思ったのだそう。

研究室では、教育研究活動のほかに、出版事業や研究発表報告展、加えて受託事業にも力を入れている。文化財修復の意義に対する認識が広がるなかで、保存修復が果たす役割は今まで以上に大きくなってきている。

上野の 寄り道 散歩道

第6回

「東京都美術館」

東京藝術大学がある上野は、歴史や伝統と新しい文化が交差するスポットとして、観光に訪れる人も多い。藝大のすぐ近くにも、由緒ある社寺や老舗、意外なエピソードを秘めた穴場が目白押しだ。大学から少しだけ足を延ばして、小さな旅に出てみよう。



1 外観

前川建築の佇まいを受け継ぎつつ、ユニバーサルデザインを採り入れた改修をおこない四月一日にリニューアルオープンした。



2 ギャラリーA

エスカレーターホールから見下ろせる吹き抜けのシンプルな展示空間（公募棟地下二階）。写真は企画展「Arts & Life...生きるための家」（～九月三十日）。



3 ギャラリーC

天井の高低差により展示の変化をつけることができる（公募棟地下二階）。写真は八十六年にわたる館の歴史を振り返る企画展「東京都美術館ものがたり時代を駆けぬけた芸術家たち」（～九月三十日）。



四月一日、東京都美術館が約二年間の大規模改修工事を終え、リニューアルオープンした。一九二六（大正十五年）五月一日に開館したこの美術館は、回顧展や名作展などのさまざまな企画展や新しい美術の動向を伝える外国美術展が開催され、美術の殿堂としての役割を担ってきた。また、新作発表の場として、「上野の美術館」と親しまれている。

現在の建物（新館）は建築家・前川國男（一九〇五～八六）の設計により、一九七五（昭和五十）年三月三十一日に竣工した。前川はモダニズム建築の巨匠ル・コルビュジエに師事し、戦前・戦後を通じて日本の近代建築の歴史に大きな足跡を残した人物である。東京都美術館に程近い国立西洋美術館の本館は、ル・コルビュジエの実施設計案をもとに前川と坂倉準三、吉阪隆正が設計をおこなった。その向かいに建つ東京文化会館も、前川の代表作のひとつだ。

新館のメインフロアは地下一階（ロビー階）に設定され、公募棟、企画棟、文化棟に取り巻かれたエスプラナード（遊歩道）から、地下一階の広場へ求心的に導くよう計画されている。この空間配置は、上野公園とのつながり



4 **公募展示室**
四つの展示室を青（第1）、黄（第2）、緑（第3）、赤（第4）で色分けして表示、誘導する。



6 **ミュージアム ショップ**
「プラスチックエーション」をコンセプトに従来の二・五倍に拡充された（中央棟ロビー階／地下一階）。

5 **エントランス**
新館開業当時そのままのデザインを活かした色鮮やかな椅子がならぶ（公募棟ロビー階／地下一階）。



7 **佐藤慶太郎記念 アートラウンジ**
東京都内の美術館を中心にした展覧会などの情報にアクセスできるインフォメーション・ラウンジ。美術館開館に寄与した実業家佐藤慶太郎の資料も展示（中央棟一階）。



8 **レストラン「MUSEUM TERRACE」**
南北の両方面がガラス貼りで、豊かな緑と外光が注ぎ込むメインダイニング。（中央棟一階）



9 **レストラン「IVORY」**
東京都美術館のグランドレストランとして洋食を中心にランチやカフェを楽しむことができる。個室もある。（交流棟一階）



を求め、なおかつ館内導線をわかりやすくするよう意図されたものだという。
地下三階・地上二階建てだった建物を、地下四階・地上四階建てに改修。企画棟、公募棟、中央棟、交流棟、事務棟で構成し、企画展示室の天井高は三・二メートルから四・五メートルになった。また、エスカレーター、エレベーターを設置して利便性を高めたという。ミュージアムショップ、休憩場所や情報コーナーも拡充され、メインダイニング、洋食、カフェの三店舗が新たにオープンした。
リニューアルオープン記念として、「マウリツハイスメ美術館展」が九月十七日まで開催。その後も、「メトロポリタン美術館展」（本年十月六日～二〇一三年一月四日）、「エル・グレコ展」（二〇一三年一月十九日～四月七日）など見応えがある展覧会が控えている。

上野の杜の 波瀾 万丈

第十四回

東京音楽学校邦楽科への長い道のり 前篇 橋本久美子

西洋音楽こそが普遍的かつ合理的な音楽である。——
進化論的音楽観をもとに進められた奇想天外な音楽教育。

進化論的音楽観

邦楽が進化すれば、やがて西洋音楽のように
広く共感を得る音楽になっていくという、今聞
けば奇想天外な考え方が明治十年代、二十年
代にはあった。

わが国の音楽教育の礎を築いた伊澤修二は
進化論の紹介者でもあった。彼が明治二十二
(一八八九)年に訳したT・H・ハックスレー講
述『進化原論』(丸善商社)緒言に伊澤曰く、「進
化論は益々学問社会に勢力を得て、其理論は(中
略)心理学にも、倫理学にも、言語学にも(中略)
皆之を適用いたし(中略)殊に教育学の一科に於
ては、人類の研究に就き、進化論に依る可きこ
とが、頗る多くあります」

明治八(一八七五)年に渡米した伊澤は、教
育学、生物学などを学び、ダーウィンの進化
論に出合う。日本に最初に進化論を紹介した
のは大森貝塚の発見者E・S・モースで、彼
が同十年に東京大学で行った講義『動物進化

論』は同十六年に石川千代松訳で世に出るが、
伊澤はその四年前にハックスレーの『On the
Origin of Species 1863(種の起源)』の始めの
二章『生種原始論』を訳し、十年後に完成版
『進化原論』を刊行。かくして進化論的音楽観
においては、西洋音楽こそが普遍的かつ合理
的な音楽であり、邦楽と洋楽の違いは進化の
度合いにあり、様式、美意識、民族性などは
斟酌の外に置かれた。

伊澤と大学南校の同期生に、〈箱根八里〉の作
歌者鳥居悦がある。音楽取調掛の第一回伝習生
で、東京音楽学校教授として大正初期まで国語
と音楽理論を教えた。伊澤の考え方に共鳴して
曰く「日本音楽は随分発達して居るもの、また
く独楽的即ち偶感的音楽の境界は脱しませ
ん然るに西洋音楽は実に科学の物にて其目的
は共楽的の音楽にて音楽も是に至りて始めて
成せるものであります」(『千葉教育雑誌』第
一二〇号、明治二十一年)。当時は、邦楽が科
学に基づいて進化すれば、国を越えて共感され
ると考えられ、実際に端唄や長唄の歌詞を上品
なものに「改良」することも行われた。

東西二洋の演奏で卒業

「東西二洋ノ音楽ヲ折衷シテ新曲ヲ作ル事」
を事業計画の筆頭に掲げた音楽取調掛は、笙、
笛、箏、箏、琵琶などを購入し、演奏会では
〈螢の光〉を「本邦雅俗及西洋管絃楽器ヲ悉ク
混用シテ合奏」した。明治十八(一八八五)年七
月、*音楽取調所(音楽取調掛は明治十八年
二月に音楽取調所と改称、同年十二月に再び音
楽取調掛)第一回全科卒業生の三名は、幸田延
がピアノとバイオリンと箏、遠山甲子(かね)がピアノ
と箏、市川ミチがピアノと胡弓など、東西二洋
の演奏で卒業した。

ところで、音楽取調掛時代には東西二洋が保
たれていたのが、東京音楽学校時代には西洋一
辺倒になったという見方があるが、音楽取調掛
が西洋音楽に習熟することで日本の音楽を補い
国楽を興すという構想のもと始まったことを想
起すれば、むしろ軸足は当初から洋楽にあり、
次第にその結果が顕著に現れてきたということ

ではなからうか。

東京音楽学校では初期の師範科生徒が箏を学
び、明治四十二(一九〇七)年には邦楽調査掛が置
かれ邦楽演奏会が開かれるようになった。大正
に入ると能楽囃子生徒養成規程が設けられ謡と
囃子の指導が行われた。また満九歳以上の男女
に広く専門実技を指導した「選科」は洋楽で始
まり、明治四十二年に箏が加わった。

邦楽科の設置

しかし昭和四(一九二九)年、選科に長唄を加
え、さらに流派を拡充して邦楽がとみに存在感
を増したのは、同三年に着任した乗杉嘉壽校長
の施策である。官立音楽学校なら邦楽を教えよ、
邦楽を「西洋音楽と対等の位置に」(『三曲』昭
和五年三月)との信念で、同十年に行われた選
科邦楽の京都大阪演奏旅行では、生徒の旅行記
によれば「校長先生は、未だ世間が正座に据え
ない邦楽の為に万丈の気焔を吐かれる。論旨
は旺(さか)んなものであつたが、至る処に諧謔が交つ

Exhibition & Concert Information

展覧会 & 演奏会

情報

演奏会スケジュール (2012年7月31日現在の情報です。今後予告なく変更することがございます。)

奏楽堂				
9月 7日(金)	藝祭 E年(声楽科3年) ミュージカル'CHICAGO'	11:00開演	無料(要整理券)	自由席
9月 7日(金)	藝祭 邦楽科大演奏会	16:30開演	無料(要整理券)	自由席
9月 8日(土)	藝祭 オルガン科学生有志コンサート	11:30開演	無料(要整理券)	自由席
9月 8日(土)	藝祭 藝@オーケストラ	17:45開演	無料(要整理券)	自由席
9月29日(土)	藝大オペラ定期第58回	14:00開演	5,000円	指定席
9月30日(日)	藝大オペラ定期第58回	14:00開演	5,000円	指定席
10月11日(木)	藝大21 和楽の美 邦楽絵巻「悟空と九尾の狐」	19:00開演	3,000円	指定席
10月13日(土)	藝大プロジェクト2012「幕末～その時、世界は？」 第3回 ジャポニスム～外から見たニッポン	<レクチャー> 15:00～ <コンサート> 16:20開演	2,000円 (セレクト券:2枚・3,000円、 3枚・4,500円あり)	自由席
10月19日(金)	藝大フィルハーモニア定期演奏会(藝大定期第353回)	19:00開演	2,000円	自由席
10月20日(土)	藝大プロジェクト2012「幕末～その時、世界は？」 第4回 黒船来航と外来音楽	<レクチャー> 15:00～ <コンサート> 16:20開演	2,000円 (セレクト券:2枚・3,000円、 3枚・4,500円あり)	自由席
10月21日(日)	日中国交正常化40周年記念 中央音楽学院(北京)との交流演奏会	14:00開演	無料	自由席
10月28日(日)	奏楽堂シリーズ特別演奏会 隅田川+カーリユ・リヴァー	16:00開演	S席 6,000円 A席 5,000円	指定席
11月 1日(木)	京都芸大、東京藝大学生オーケストラ交流演奏会	18:30開演	無料	自由席
11月 3日(土・祝)	東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校第24回定期演奏会	14:30開演	無料(往復ハガキによる申込み制)	自由席
11月10日(土)	奏楽堂トーク&コンサート「学長と語ろうXII」	15:00開演	無料(往復ハガキによる申込み制)	自由席
11月23日(金・祝)	藝大フィルハーモニア・合唱定期演奏会(藝大定期第354回)	15:00開演	2,000円	自由席
11月24日(土)	藝大定期吹奏楽 第78回	15:00開演	1,500円	自由席
11月25日(日)	ハイドン・シリーズ 室内楽演奏会 (ハイドントータル完成記念)	<レクチャー> 14:30～ <コンサート> 16:00開演	2,000円	自由席
11月28日(水)	邦楽定期演奏会 第79回	18:00開演	2,000円	自由席
11月30日(金)	ハイドン・シリーズ 室内オーケストラ演奏会	19:00開演	2,000円	自由席
モーニング・コンサート 9月12日(水)、11月1日(木)、11月15日(木)		11:00開演	無料(要整理券)	自由席

※ 特にお断りのない限り、コンサートの会場はすべて本学構内の奏楽堂です。

※ 詳細につきましては、9月末発行予定の「平成24年度コンサートスケジュール(後期版)」をご覧ください。

※ 演奏会の曲目、開演時間などの詳細については、決定次第、大学ホームページで発表いたします。http://www.geidai.ac.jp/

※ 本学には駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮ください。

※ スケジュール・曲目・出演者等は都合により変更となる場合がございますので、ご了承ください。

※ チケットの取り扱い

- 藝大アートプラザ TEL: 050-5525-2102
- ヴォートル・チケットセンター TEL: 03-5355-1280 http://ticket.votre.co.jp/
- チケットぴあ TEL: 0570-02-9999 http://t.pia.jp/
- (一部携帯電話・PHS・IP電話はご利用いただくことができません)
- 東京文化会館チケットサービス TEL: 03-5685-0650 http://c11sbany.securesites.net/ticket/
- イープラス(e+) http://eplus.jp/

※ 演奏会についてのお問い合わせ先

- 演奏芸術センター TEL: 050-5525-2300

TOPIC
2

東京藝術大学創立125周年記念事業 藝大アーツ・サミット2012 参加公演 藝大21 和楽の美「悟空と九尾の狐」

音楽学部と美術学部の壁を超えたコラボレーション企画として、高い評価を受けている「和楽の美」公演が、10月11日(木)、本学の創立125周年を記念して開催される「藝大アーツ・サミット2012」の参加公演として行われます。今年は一昨年よりスタートした「西遊記」を翻案した孫悟空シリーズの最終回、「悟空と九尾の狐」を上演します。

悟空の敵役として毎回登場する、篠内佐斗司教授(文化財保存学) 考案の魔物たちが話題を集めていますが、今回は中国起

源の伝説の妖獣「九尾の狐」です。「九尾の狐」は中国だけでなく、日本やインドにも出没し、絶世の美女に変身しては世の中を惑わします。日本では鳥羽上皇の寵愛する「玉藻前」という美しい姫に変化しますが、最後にはその正体が暴かれ、那須野の原で討たれ殺生石に封じ込められるという伝説はあまりにも有名です。

悟空と九尾の狐によって繰り広げられる丁々発止の戦いともども、数々の邦楽の名曲と新曲をお楽しみください。



藝大21 和楽の美 (前回公演より)

TOPIC
1

東京藝術大学創立125周年記念事業 漆芸 軌跡と未来

東京藝術大学の漆芸研究領域は、東京美術学校創設時に開設され125年に至る長い歴史を歩んできました。その間東京美術学校第1期生の六角紫水をはじめとして、日本の漆芸界に影響を与えた、数多くの漆芸家を輩出してきました。

本展は、125年培ってきた「軌跡」の部と、現代に漆とともに生きる作家たちの「未来」の部で構成されています。

「軌跡」の部では、東京藝術大学に収蔵される作品と資料とで振り返ります。

「未来」の部では、漆芸研究領域を卒業・修了し、

活躍する漆芸作家の作品を展示します。

漆が持つ輝きと、その魅力に彩られた作家たちの個性をお楽しみください。



右: 六角紫水《岩に鶴松図蒔絵丸額》1904(明治37)年 東京藝術大学
左: 高橋節郎《澄高》1990(平成2)年 東京藝術大学

展覧会スケジュール (2012年7月31日現在の情報です。今後予告なく変更することがございます。)

本館

7月12日(木)～ 9月17日(月・祝) 日中国交正常化40周年記念 特別展「草原の王朝 契丹―美しき3人のプリンセス―」 入場料: 一般1,400円 学生800円(中学生以下は無料)

10月 5日(金)～10月21日(日) 東京藝術大学創立125周年記念事業 漆芸 軌跡と未来 入場料: 一般500円 学生300円(中学生以下は無料)
10月10日(水)～10月21日(日) 東京藝術大学創立125周年記念事業 アジア現代芸術研究事業 交流展「東京 北京 現代アート 紙非紙 2012」 入場料: 無料

11月 3日(土・祝)～12月 9日(日) 尊厳の芸術展 ―The Art of Gaman― 入場料: 無料
11月15日(木)～12月 2日(日) 中島千波退任展記念展 人物図鑑 入場料: 無料
12月16日(日)～12月25日(火) 東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展 入場料: 無料
1月26日(土)～ 1月31日(木) 第61回東京藝術大学卒業・修了作品展 入場料: 無料

陳列館

9月 4日(火)～ 9月17日(月・祝) 谷川岳高山植物園鑑原画展 入場料: 無料
9月20日(木)～ 9月26日(水) 日本画第一研究室発表展 ICHIKENTEN 2012 入場料: 無料
9月30日(日)～10月 6日(土) イモノの景色 東京・金沢・高岡・秋田 鑄金展 入場料: 無料
10月10日(水)～10月21日(日) 第3回東京藝術大学教員有志による 入場料: 無料

10月10日(水)～10月21日(日) 被災地復興支援・文化財救済作品展(仮称) 入場料: 無料
東京藝術大学創立125周年記念事業 アジア現代芸術研究事業 交流展「東京 北京 現代アート 紙非紙 2012」 入場料: 無料
10月30日(火)～11月 4日(日) 東京スカイツリー®を描く絵画展 入場料: 無料
11月 1日(木)～11月11日(日) 美しさの新機軸 一日本画 過去から未来へー 公益財団法人 入場料: 無料
芳泉文化財団 第一回文化財保存学日本画研究発表展
11月20日(火)～12月 2日(日) 退任記念 山下了是 染色作品展 赧-TANN- 入場料: 無料
12月 7日(金)～12月24日(月・祝) 渡辺好明遺作展 一光ではかられた時 入場料: 無料
1月 4日(金)～ 1月23日(水)(予定) 池田政治退任展「空間の色あい」(仮称) 入場料: 無料
1月26日(土)～ 1月31日(木) 第61回東京藝術大学卒業・修了作品展 入場料: 無料

正木記念館

11月 1日(木)～11月11日(日) 美しさの新機軸 一日本画 過去から未来へー 公益財団法人 入場料: 無料
芳泉文化財団 第一回文化財保存学日本画研究発表展
11月15日(木)～12月12日(水) 平櫛田中コレクション2012 彫刻展示室(田中記念室) 開室 入場料: 無料

※ 開館時間は、10:00～17:00(入館時間は16:30まで)。月曜休館。
ただし、月曜日が祝日の場合は開館し、翌日に休館することがあります。
なお、展覧会によっては、開館時間および休館日が異なる場合がございますので、その都度ご確認ください。

※ 展覧会の名称・会期については、変更することがございます。

※ 本学には駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮ください。

※ 展覧会についてのお問い合わせ先

- ハローダイヤル TEL: 03-5777-8600
- 大学美術館 TEL: 050-5525-2200

※ 展覧会の紹介は、下記ウェブサイトでご覧になれます。
http://www.geidai.ac.jp/museum/

出版会活動

◆「幸田延の『薄歌日記』」を
三月五日より発売

日本の近代洋楽史の発展に大きな貢献をした幸田延。彼女が明治四十二年に東京音楽学校から教授職の休職を命じられ、ベルリン・ウィーン、パリ、ロンドンを旅していた八ヵ月余りの間に書いた未公開の日記を、初めて翻刻・現代語訳。

延自身もこの遊学の本当の目的を知らされておらず、スリラー小説のような趣きがあるが、遊学の意味は次第に明らかになる。



◆DVD「アニメーション専攻 第三期生
修了作品集2012」を三月七日より発売

二〇一二年三月に修了したアニメーション専攻第三期生。修了制作十四作品および一年次制作十四作品を収録し、DVDとして発売。若く未完成ながらも独創性に富んだ十四の視点で、学生たちが二年間を費やして探求した「アニメーション表現との対話」。その成果物である短編作品群は、アニメーション芸術の次のステージを予感させる。二〇一二年ベルリン国際映画祭での一期生の銀熊賞受賞など、国内外での活躍もめざましい本学アニメーション専攻の最新の作品群をぜひご覧いただきたい。



◆DVD「映画専攻 第五期生修了作品集
2011」を三月二十二日より発売

多方面で頭角を現し、期待と注目を浴びる映画専攻。二〇一一年三月には、第五期生を送り出した。本年度DVD収録の五期生が在学中に制作した「紙風船」は、大正から昭和にかけて活躍した劇作家、岸田國士の作品を豪華キャスト陣出演にて映画化ということと話題に。監督・製作・脚本・撮影照明・美術・録音・編集、それぞれの領域の学生が集大成として取り組んだ、その努力と成果があらわれた作品集である。



◆「楽譜 山田流箏曲 山田校校作曲
『四ツ物全集』」を三月三十日より発売

山田流箏曲の流祖にあたる山田斗養一校（一七五七―一八一七）が作曲した奥曲「四ツ物」のCD付き楽譜全集。箏、三弦の並列譜とし、曲解説、歌詞通釈に加えて実際の演奏を収録したCDを付けた。CD付き楽譜は、邦楽界及び山田流箏曲界ではまだ見られない新しい試み。また、大曲は、学生のレッスンではあまり使われていないため、学内だけににとどまらず、学外においても大変有意義な研究書物になるという。



東京藝術大学出版会の出版物等は、本学藝大アートプラザ、アマゾン（ネット販売）および一般書店にて取り扱っております。詳しくは、藝大アートプラザ（〇五〇―五五二五―二一〇二）まで

交流

◆連携・協力に関する協定締結

三月二十三日、新国立劇場において、本学は財団法人新国立劇場運営財団との連携・協力に関する協定書を取り交わした。この協定は、両者が、我が国のオペラ制作および芸術文化の発展に資することを目的とし、新国立劇場での公演・人材交流・人材育成などについて連携・協力を推進することを目的としたもの。調印式は、宮田亮平学長と福地茂雄財団法人新国立劇場運営財団理事長、尾高忠明音楽学部教授・新国立劇場オペラ芸術監督らが出席し、おこなわれた。

新国立劇場は、「国際的に比肩しうる高い水準の現代舞台芸術を自主制作により公

受章・受賞

◆宮田亮平学長が「日本芸術院賞」を受賞

三月十六日、宮田亮平学長の作品「シュプリングエン」が、平成二十三年年度日本芸術院賞を受賞した。六月十八日には、授賞式が天皇・皇后両陛下をお迎えして日本芸術院会館で開かれた。

◆小椋範彦准教授が「紫綬褒章」を受章

美術学部工芸科（漆芸）の小椋範彦准教授が、平成二十三年秋の褒章において、紫綬褒章を受章した。

◆野平一郎教授が「紫綬褒章」を受章

音楽学部作曲科の野平一郎教授が、平成二十四年春の褒章において、紫綬褒章を受章した。

◆小椋範彦准教授が「MOA美術館賞」を受賞

六月九日、美術学部工芸科（漆芸）の小椋範彦准教授の作品「乾漆削貝時絵飾箱」が、MOA岡田茂吉賞の工芸部門においてMOA美術館賞を受賞した。

◆伊藤有孝教授が「第22回香港国際映画祭 火の鳥大賞」を受賞

六月一日、大学院映像研究科アニメーション専攻の伊藤有孝教授の作品「HARBOR TALE」が22nd ZLIN FILM FESTIVALにおいてアニメーション部門最優秀賞及び観客賞を受賞した。

◆山村浩二教授が「第26回香港国際映画祭 火の鳥大賞」を受賞

四月三日、大学院映像研究科アニメーション専攻の山村浩二教授の作品「マイブリッジの糸」が、第三十六回香港国際映画祭で火の鳥大賞（短編映画部門グランプリ）を受賞した。

また七月二十七日には、アニメーション制作などの多彩な業績について「川喜多賞」を受賞した。

◆佐藤雅彦教授が「芸術選奨文部科学大臣賞」・「D&AD賞」を受賞

三月十三日、大学院映像研究科メディア映像専攻の佐藤雅彦教授が、平成二十三年度（第六十二回）芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した。メディア芸術部門での受賞であり、授賞対象はTV番組「0655」[2015]。

◆小谷元彦准教授が「芸術選奨文部科学大臣新人賞」を受賞

三月十三日、美術学部先端芸術表現科の小谷元彦准教授が、平成二十三年度（第六十二回）芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞した。美術部門での受賞であり、授賞対象は「幽体の知覚」展の成果。

◆D&AD Professional Awards 2012においてD&AD賞を受賞した。

◆伊藤有孝教授が「第22回香港国際映画祭 火の鳥大賞」を受賞

六月一日、大学院映像研究科アニメーション専攻の伊藤有孝教授の作品「HARBOR TALE」が22nd ZLIN FILM FESTIVALにおいてアニメーション部門最優秀賞及び観客賞を受賞した。

◆山村浩二教授が「第26回香港国際映画祭 火の鳥大賞」を受賞

四月三日、大学院映像研究科アニメーション専攻の山村浩二教授の作品「マイブリッジの糸」が、第三十六回香港国際映画祭で火の鳥大賞（短編映画部門グランプリ）を受賞した。

また七月二十七日には、アニメーション制作などの多彩な業績について「川喜多賞」を受賞した。

運営

◆平成二十三年卒業式

三月二十六日、奏楽堂にて平成二十三年卒業式が実施された。

学長式辞では、「今（いま）」と「心（こころ）」が重なった「念」という文字を、「今」この時を忘れずに「心」に想いをとどめ、新たな想いを「心」にのしながらから前進する諸君を讃歌として褒めたたえる文字」と説明し、「三・一一後の日本を元気にするため、藝術の伝道者として大いに発信して欲しい」と大学を巣立つ若者たちを激励した。



◆平成二十四年度入学式

四月五日、奏楽堂にて平成二十四年度入学式が挙行された。

学長式辞では、宮田学長が式辞の最中に壇上で「行」という文字を揮毫（きこう）し、「人生の岐路でど



◆文化庁長官と語る会（白熱教室）

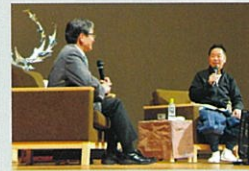
六月五日、本学陳列館二階において、文化庁長官と語る会（白熱教室）が開催された。本学の宮田学長が開会の挨拶を行った後、近藤長官により、スクリーンに投影された資料を解説しながら、「21世紀文明と文化・芸術の役割」というテーマで講演が行われた。講演中には、参加者の学生との活発な議論も交わされ、タイトルどおりの白熱教室となった。



◆「学長と語ろう」

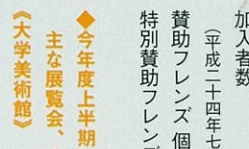
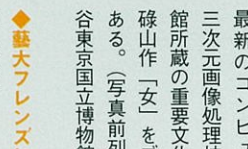
ゲストに和太鼓奏者である林英哲氏を招き、第十一回「学長と語ろう 奏楽堂トーク&コンサート」が開催された。会場である本学奏楽堂では、約一〇〇〇名のご来場のお客様が約二時間にわたり対談と演奏会を楽しんだ。

林氏の迫力あふれる演奏を皮切りに始まった第一部では、「う、魅する和の音」と題し、林氏が和太鼓を志した頃のことやこれまでの演奏活動を実際の映像を交えながら語られ、会場を魅了した。林氏が本学で毎年おこなっている授業に



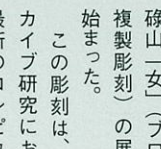
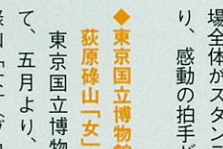
ださっている授業に美術学部の学生も参加しているという話から、実は林氏自身も元々は美術を志していたことが明らかになり、会場を大いに驚かせた。

第二部では、林氏をソリストとして迎えて、学生オーケストラとの共演が実現し、演奏終了後には、その圧倒的なパフォーマンスに、会



◆「学長と語ろう」

ゲストに和太鼓奏者である林英哲氏を招き、第十一回「学長と語ろう 奏楽堂トーク&コンサート」が開催された。会場である本学奏楽堂では、約一〇〇〇名のご来場のお客様が約二時間にわたり対談と演奏会を楽しんだ。



◆「学長と語ろう」

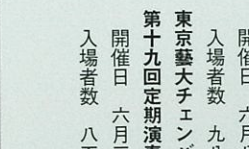
ゲストに和太鼓奏者である林英哲氏を招き、第十一回「学長と語ろう 奏楽堂トーク&コンサート」が開催された。会場である本学奏楽堂では、約一〇〇〇名のご来場のお客様が約二時間にわたり対談と演奏会を楽しんだ。

◆「学長と語ろう」

ゲストに和太鼓奏者である林英哲氏を招き、第十一回「学長と語ろう 奏楽堂トーク&コンサート」が開催された。会場である本学奏楽堂では、約一〇〇〇名のご来場のお客様が約二時間にわたり対談と演奏会を楽しんだ。

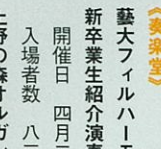
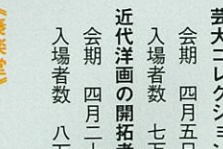
◆「学長と語ろう」

ゲストに和太鼓奏者である林英哲氏を招き、第十一回「学長と語ろう 奏楽堂トーク&コンサート」が開催された。会場である本学奏楽堂では、約一〇〇〇名のご来場のお客様が約二時間にわたり対談と演奏会を楽しんだ。



◆「学長と語ろう」

ゲストに和太鼓奏者である林英哲氏を招き、第十一回「学長と語ろう 奏楽堂トーク&コンサート」が開催された。会場である本学奏楽堂では、約一〇〇〇名のご来場のお客様が約二時間にわたり対談と演奏会を楽しんだ。



◆「学長と語ろう」

ゲストに和太鼓奏者である林英哲氏を招き、第十一回「学長と語ろう 奏楽堂トーク&コンサート」が開催された。会場である本学奏楽堂では、約一〇〇〇名のご来場のお客様が約二時間にわたり対談と演奏会を楽しんだ。

◆「学長と語ろう」

ゲストに和太鼓奏者である林英哲氏を招き、第十一回「学長と語ろう 奏楽堂トーク&コンサート」が開催された。会場である本学奏楽堂では、約一〇〇〇名のご来場のお客様が約二時間にわたり対談と演奏会を楽しんだ。

◆「学長と語ろう」

ゲストに和太鼓奏者である林英哲氏を招き、第十一回「学長と語ろう 奏楽堂トーク&コンサート」が開催された。会場である本学奏楽堂では、約一〇〇〇名のご来場のお客様が約二時間にわたり対談と演奏会を楽しんだ。

第25号刊行にあたって

団体や協会、大学などの広報誌は、時に情報発信をしているのか分からなくなって来る事があります。しかも、印刷代も置き場所も必要ないデジタルデバイスが発達したこのご時世。紙媒体の存在意義を今一度、考え直さざるを得ません。

一つ思うのは、今その時の情報を一旦抜き出して「書き換え不可能」な状態にしておく。それによって生じる「説得力」というのはデジタルメディアとは異なる大事な一面だと思います。これらの事を意識して、藝大らしく、写真の質やデザインにも気を配りながら、読んでみたい冊子、取り上げてもらいたい雑誌を目指しています。今号も、先生方それぞれの異なる切り口が色んな形で表現されており、充実した内容になっています。

藝大通信編集長
松下 計

展覧会・演奏会の最新情報は、東京藝術大学公式 Web サイト (<http://www.geidai.ac.jp/>) をご覧ください。

- 展覧会についてのお問い合わせ先
東京藝術大学大学美術館
Tel. 050-5525-2200
NTT ハローダイヤル
Tel. 03-5777-8600
- 演奏会についてのお問い合わせ先
東京藝術大学演奏芸術センター
Tel. 050-5525-2300

- 演奏会チケットの取り扱い
藝大アートプラザ
Tel. 050-5525-2102
ヴォートル・チケットセンター
Tel. 03-5355-1280
チケットぴあ
Tel. 0570-02-9999
(一部携帯電話・PHS・IP 電話はご利用いただくことができません。)
- 東京文化会館チケットサービス
Tel. 03-5685-0650
イープラス (e+)
<http://eplus.jp/>

- 藝大アートプラザのご案内
Tel. 050-5525-2102